

第一章…夕立と秘密の誘い

その日、街は突然の夕立に襲われた。

激しい雨音が、第壹中学校の古びた教室の窓を打ち付けている。

放課後の誰もいない空間。

俺は、窓の外を眺めていた。

「——降り止まないね」

静かな声が、背後から聞こえた。

振り返ると、そこにいたのは綾波レイ。

クラスメイトだが、感情を表に出すことも、人と関わることも稀な、まるで透き通った氷のような少女だ。

「ああ、ずいぶん降るな」

俺の視線を受けても、彼女の表情は変わらない。  
しかし、その唇が、ゆっくりと動いた。

「……今日は、誰もいない。このまま、ここで待つ？」

「そうするしかないだろうな。傘もないし」

綾波は、ゆっくりと俺に近づいた。

いつものように、ほとんど無臭。ただ、どこか遠い海のような、静謐な気配だけが漂っている。

彼女は、俺の顔を、じっと見つめた。

その、深紅の瞳が、雨の光を反射して、わずかに揺らめく。

「……傘は、ない」

「知ってるよ」

「けれど、雨を避けられる場所なら、ある」

綾波は、そう言って、俺の制服の袖を、静かに、しかし、逃がさないように、掴んだ。その、手のひらの温度が、やけに熱い。

「行く？」

俺は、彼女の瞳の奥に、いつもは隠されている、微かな熱、微かな誘いを感じた。まるで、秘密の儀式へ招かれるかのように。俺は、ただ頷いた。

「……ああ。行こう」

綾波に連れられてたどり着いたのは、ネルフの職員用居住区のはずれにある、古びた日本家屋だった。

その裏庭に、ひっそりと隠されていたのが、その温泉。湯気が薄く立ち上る、小さな露天風呂。

「……誰も、来ない」

彼女は、そう言って、俺の手を離した。

「ここが……言ってた場所か」

「うん。……使途と戦うために、疲れた体を癒す。そういう、施設」

彼女の言葉は、いつも通り、感情を排した説明だ。だが、その視線は、ずっと俺の動きを追っている。

俺は、戸惑いながらも、脱衣所へと続く、古い木戸を開けた。

湯船の縁に腰掛け、熱い湯に足を浸す。

じんわりと、体の芯から、緊張が解けていく。

「……気持ちいいな」

視線を上げると、綾波は、まだ湯船に入らず、脱衣所と湯船の間の石畳に立っていた。制服を、ゆっくりと、脱いでいる。

一つ一つ、丁寧な。

ブラウスのボタンを外す。スカートを滑り落とす。

雨上がりの空気に、彼女の白い肌が、少しずつ、露わになっていく。

(……白いな)

まるで、生まれたての陶器のような、完璧な肌。

肉体は、エヴァのパイロットとして、しなやかに鍛えられているのが分かる。だが、その奥にある、女性としての曲線は、まだ未発達で、危うい。

そして、彼女は、ついに、最後の衣を脱ぎ捨てた。

無防備に、全身をさらす。

「……入らないのか？」

俺が尋ねると、彼女は、一瞬だけ目を伏せた。

その頬が、湯気でもないのに、ほんのり、赤く染まっているように見えた。

「………入る」

彼女は、ゆっくりりと、湯船に足を踏み入れた。

湯の熱さに、わずかに肩を震わせる。

俺たちの間に、静かな時間が流れる。

湯の音と、竹筒を伝って流れる水の音だけ。

「……」

綾波は、俺の隣に、そっと腰を下ろした。  
肌が触れ合うほどの、近さ。

「……隣に、座って、いい？」

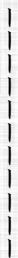
「ああ、もちろん」

湯に浸かると、彼女の硬く閉ざされていた表情が、少しだけ、緩んだように見えた。  
微かに、吐息が漏れる。

「……気持ちいい」

彼女が、感情を込めて、そう言うのを、俺は初めて聞いた気がした。それが、俺の心を、不意にざわつかせた。

この空間が、俺たちだけの、秘密の場所になった、その瞬間だった。



## 第二章…触れる肌と、初めての熱

湯に浸かるうち、綾波は、遠慮がちに、しかし確実に、俺の隣へと体を寄せてきた。肩と肩が、触れ合う。

湯の熱さとは違う、肌の温度を感じる。

「……………温まる」

彼女は、目を閉じ、長い息を吐いた。

俺も目を閉じて、静かな水音に耳を傾ける。

その時、彼女の細い指が、そっと、俺の腕に触れた。

一瞬、緊張が走る。

「……………冷たい」

綾波は、そう囁いた。

俺の体温が高いのか、それとも、彼女の体がまだ冷えているのか。

「……………私の体は、冷たい？」

俺は、その問いに答えず、静かに、彼女の指を掴んだ。

そして、そのまま、彼女の指先を、俺の頬にそっと押し当てた。

「……………どうだ？」

彼女の指先が、俺の頬の熱を感じ、微かに震える。

彼女は、驚いたように目を見開いた。

「……………熱い」

彼女の瞳に、俺の顔が、湯気越しに映る。

その、赤い瞳の中に、初めて、戸惑いと、好奇心以外の感情を見た。

俺は、彼女の手を掴んだまま、湯船の中で、そっと、指を絡めた。

それは、友愛でも、愛情でもない。

ただ、人間と人間の、根源的な接触。

彼女は、抵抗しなかった。

むしろ、俺の指を、ぎゅっと、握り返してきた。

「……この感触、知らなかった」

彼女の吐息が、甘く、熱を持つ。

俺は、湯船の中で、彼女の体を、正面から抱き寄せた。

胸と胸が、触れ合う。

水中で、彼女の柔らかい乳房が、俺の胸に押し付けられる感触。

「……っ！」

綾波は、一瞬、息を詰まらせた。

俺の体温が、彼女の白い肌に、直接、伝わっていく。

「…………どうだ？ まだ、冷たいか？」

「…………うん。…………熱い。…………すごく、熱い」

その声は、震えていた。

湯の温度よりも、俺の体温よりも、もっと、内側から湧き出る、初めての熱。

俺は、彼女の首筋に顔を寄せた。

湯の匂いと、微かな石鹸の残り香。そして、彼女自身の、清潔な匂い。

そのまま、俺は、彼女の唇に、そっと、自分の唇を重ねた。

「…………んっ…………」

短く、息を呑む音。

彼女の唇は、湯で濡れて、温かい。

最初は戸惑っていた彼女だが、すぐに、その熱を受け入れた。

俺は、湯船の中で、深く、彼女とキスをした。

全身の血流が、一気に加速するのを感じる。

俺たちは、秘密の温泉の中で、一つになる、初めての熱を、共有していた。

第三章…湿った愛の囁き

キスは、長く、深くなった。

俺の舌が、彼女の口内に侵入すると、綾波は、全身の力を抜き、ただ、俺に身を委ねた。彼女の小さな舌が、戸惑いながらも、俺の舌を受け入れ、絡みつく。

「んんっ……ふ、あ……っ」

湯の中で、初めて聞く、彼女の甘く、乱れた吐息。  
それは、まるで、閉ざされていた蕾が開くかのような、か細い音だった。

俺は、彼女の体を抱きかかえ、湯船の縁に、ゆっくりともたれさせた。  
そして、彼女の白い首筋に、舌を這わせる。

「……………っひ……………っ。ああ……………っ」

彼女の喘ぎ声が、湯気の中に、小さく響く。

この温泉は、俺たちだけの、秘密の音を、吸収してくれている。

俺の指が、湯の中で、彼女の濡れた乳房に触れた。

小さく、しかし、張り詰めた、硬さ。

「……………や、っ……………」

彼女は、小さな抵抗の声を上げたが、それはもう、拒絶ではない。

むしろ、更なる刺激を求める、甘い、吐息の混じった、請願だった。

俺は、その熱を逃さないように、湯の中で、彼女の乳房を、優しく、揉むように愛撫した。

「んんんっ！ ああ……っ！ あ……っ！」

彼女の喘ぎ声が、だんだんと大きくなる。

湯の音が、その声を隠してくれる。

「……ここ、が……っ。ここが、変に、熱い……っ」

彼女は、俺の肩を掴み、その爪が、俺の肌に、微かに食い込んだ。

その痛みさえも、俺にとっては、甘い快感の一部となった。

俺は、キスをしながら、湯の中で、彼女の腰に手を回した。

そして、ゆっくりと、その手を、彼女の、下半身へと滑らせる。

「……………っ！？……………そこ、は……………っ！」

彼女は、湯の中で、硬く、体を強張らせた。

「……………いいだろ。もっと、熱くなりたいんだろ？」

俺が、優しく、囁くように言うと、彼女の抵抗は、消えた。

彼女は、俺の耳元で、湿った、震える吐息を漏らした。

「……………んん。……………し、て。……………もっと、熱く……………」

俺は、湯の中で、彼女の脚の間に、自分の体を、深く、押し込んだ。  
俺の固いものが、彼女の柔らかかな、内側に触れる。

「……………っは……………っ！ああ……………っ」

俺たちは、湯の熱さの中で、互いの体を、求め合う。

温泉の湯気が、俺たちの、秘密の愛の囁きを、優しく包み込んでいた。

#### 第四章…濡れた胎動、快感の淵へ

湯の熱が、俺たちの理性を、溶かし始めていた。

俺の固い塊が、彼女の柔らかな、濡れた入り口に、優しく、しかし確かな圧をかける。

「……………んっ……………ふ、ふう……………っ」

綾波は、俺の首に腕を回し、瞳を閉じたまま、甘い吐息を繰り返す。

俺は、もう我慢できなかった。

「……………入るぞ」

俺は、優しく、しかし、躊躇なく、一気に彼女の中へ、突き進んだ。

「——ひいつ！ ああ……っ！ んんん……っ！」

湯の中で、綾波は、短い悲鳴を上げた。

彼女の体は、まだ小さく、その内側は、どこまでも狭い。

だが、その狭さが、俺の全身を、激しい快感で貫く。

「……………っは……………っ！ きつい……………っ！ あやな、すぐく、きつい……………っ」  
「……………あ、あ……………っ！ い、痛い……………っ！ でも、もつと……………っ！」

痛みに耐えるように、彼女は、俺の背中を、強く搔いた。

だが、その声には、確かに、快感の甘さが混じり始めている。

俺は、すぐに、腰を動かし始めた。

ゆっくりと、深く、彼女の内側の熱を、確かめるように。

「んんんっ！ ああああ……っ！ すごい、すごい……っ！」  
湯の中、彼女の体は、俺の動きに合わせて、揺れる。

「……っは……っ！ 奥、に……っ！ 奥が、すごく、熱い……っ！」

俺は、彼女の最も深い場所を、狙い澄まして、突き上げる。

「——ひいっ！ んんんんんっ！ あそこ……っ！ あそこ、は……っ！ ああ……っ！」  
彼女は、俺の肩口に顔を埋め、声押し殺そうとするが、甘い喘ぎ声は、湯気の中に漏れ出してしまう。

「……っ！ ここ、だろ……っ！ ここが、一番、気持ちいいんだろ……っ？」

俺は、彼女の耳元に、荒い息を吹きかけながら、さらに激しく、腰を動かした。

「……っは……っ！ ちがう……っ！ ちがう、もつと……っ！ もつと、強く、深く……っ！

ああああ……っ！」

彼女の言葉は、もう、快感の波に飲み込まれて、意味をなさない。

俺の胸の上で、彼女の小さな乳房が、上下に揺れる。

濡れた肌が、互いに、音を立てて絡み合う。

「……っは……っ！あやな、もう、いけるか……っ？」

俺の問いに、彼女は、言葉ではなく、全身の震えて答えた。

「……んんんんっ！ああああああああっっ！！」

彼女は、俺の腰を、必死に抱きしめ、硬く、体を強張らせた。

俺は、その瞬間、彼女の奥から湧き出る、熱い、胎動のような快感に、飲み込まれた。

「——っっ！！ああああああああっっ！！」

湯の音が、一瞬、遠ざかる。

俺たちは、秘密の温泉の中で、一つになり、快感の淵に、沈み込んでいった。

—————

## 第五章…温泉の夜、溶け合う魂

湯から上がり、俺たちは、湯船のそばの休憩スペースに移動した。

古い畳の上に敷かれた布団。

湯上がりで火照った体は、まだ熱を帯びている。

俺は、彼女を布団の上に押し倒した。

湯に濡れた彼女の髪が、畳に広がる。

白い肌に、紅い瞳。その全てが、俺の衝動を掻き立てる。

「…………ふう…………っ」

彼女は、甘い吐息を漏らしながら、俺を見つめた。

その瞳は、もう、感情を閉ざした青ではなく、愛を乞う、濡れた紅。

俺は、彼女の上に覆いかぶさった。

「…………まだ、熱が、足りないな」

彼女の肌に触れると、湯上がりの熱とは違う、高揚した興奮の熱が伝わってきた。

「…………ううん。…………もつと、熱く、して」

彼女は、そう言って、俺の首筋に、手を回した。

その仕草は、もう、以前の無機質な綾波ではない。

愛を知り始めた、一人の女性の、甘い、求めだ。

俺は、再び、彼女の唇を塞いだ。

今度のキスは、湯の中よりも、さらに激しく、深く、貪欲に。

「んんんっ！ふ、あ……っ！」

俺の舌が、彼女の口内を、徹底的に蹂躪する。

彼女は、抗うことなく、ただ、甘い喘ぎ声と、熱い吐息だけを、俺に与えてくれる。

俺は、彼女の体を、下から上へ、優しく、しかし、確かな意志をもって、撫で上げた。  
乳房、腹部、そして、股間へ。

彼女の股間は、もう、昨夜の快感の記憶を蘇らせ、粘性の高い愛液で、しっとり濡れている。

「……っ！ああ……っ！ここ、が……っ、ここ、が……っ！」

俺の指が触れた瞬間、彼女の体が、大きく、跳ね上がった。

俺は、その濡れた入り口に、指を、一本、二本と、ゆつくりと差し込む。

「んんんんっ！や、め……っ！ああああ……っ！もう、すごい、こと、に……っ！」

彼女は、腰を浮かせ、俺の指を、受け入れようと、求める。

その熱い内側が、俺の指を、締め付けてきた。

「……っは……っ！すごく、熱い……っ！もう、こんなに、濡れてるのか……っ！」

俺は、指を抜くと、彼女の体の熱を、そのまま、自分の固い塊に、押し付けた。

「……っ！ああ……っ！」

彼女は、息を呑み、そして、自ら、俺の腰を、布団の上で、引き寄せた。

「……早く……っ！早く、欲しい……っ！」

俺は、彼女の求めるままに、再び、その奥深くへと、突き進んだ。

「——んんんんっ！ああああああっ！！！」

彼女は、歓喜の悲鳴を上げ、俺の背中に、両足を、強く、絡みつけた。

布団の上で、俺たちの体は、再び、激しいリズムを刻む。

温泉の熱が、俺たちの魂を、深く、深く、溶かし合っていた。

エピローグ…夜明けの熱、溶け合う絆

朝の光はまだ淡く、部屋を満たすのは、昨日からの、ねっとりとした熱気だけだった。

俺は、浅い眠りから目覚め、すぐに気づく。

綾波の細い体が、俺の腕の中で、水面に浮かぶようにびたりと張り付いている。昨夜の戦いの跡は、俺たちの肌に残された爪痕と、汗と、愛の匂い。

「……………」

俺の動きに気づいたのか、彼女は甘く、幼い吐息を漏らした。

彼女の濡れた髪が、俺の鎖骨の上で、優しくくすぐる。

「……………おはよう」

俺は囁き、彼女の頬にキスを落とす。

「……………ん。おは、よ」

顔を上げる彼女の瞳は、赤い。しかし、昨日の無表情な青ではない。愛と眠気に蕩けた、血

色の赤だ。

俺は、彼女の腰に手を回した。浴衣も何もかも、昨夜のうちに脱ぎ捨てられている。俺たちの肌の間には、シーツの摩擦と、熱だけがある。

彼女の股間から、昨夜の残滓が、まだ温かく、俺の太腿を濡らしているのを感じた。

「……まだ、熱いな」

俺が意地悪く嘯くと、綾波は、俺の胸に顔をうずめて、小さく、しかし明確に、身を震わせた。

「……んん……っ。だめ、まだ……」

「まだ、どうした？」

俺は、彼女の背中を、下から上へ、優しく撫でる。

昨日の夜に、何度も突き上げた、体の奥の記憶が、鮮やかに蘇ってくる。

「……………あ……………っ」

彼女は、俺の腕の中で、小さく、しかし、全身が震えるような、甘い喘ぎ声を上げた。俺の指が触れただけで、もう彼女の体は、快感の淵にいる。

「……………感じやすい体になったな」

「……………やだ……………っ、もう。そ、んなこと、言わ、ないで……………っ」

顔は、俺の胸の中に隠したままだ。しかし、その声は、恥じらいと、期待で、潤んでいた。

俺は、彼女の熱く、柔らかい腰を、俺の腰へと、引き寄せた。

股間に、固く、熱く、膨れ上がった俺の塊が、再び、彼女の、入り口の柔らかかな部分に触れる。

「……………っ！ ああ……………っ！」

彼女は、顔を上げ、驚きと、焦燥の瞳で、俺を見つめた。

「もう朝だが……、まだ、夜が明けてないみたいだ」

俺は、そう言つて、優しく、彼女の濡れた入り口に、先端を、押し付けた。

「ふ……っ、ん、ん……っ！」

彼女は、抵抗なく、しかし、喘ぎながら、両足を、ゆつくりと、受け入れるように開いた。

夜明けの光の中、俺は、再び、彼女の奥へ、静かに、深く、深く、沈み込んでいく。

「——ん……っ！ ああ……っ！」

今度は、昨夜のような、痛みの悲鳴はない。

しかし、その声は、より甘く、より深く、魂を揺さぶる喘ぎ声だった。

熱いものが、内側から、俺の体へ、流れ込んでくる。

「……っは……っ。あやな……っ！ 溶けてる、みたいだ……っ」

「……ふ……っ！ あつい……っ！ あああ……っ！ すごく、あつい……っ！」

俺の体も、彼女の体も、一瞬で、昨夜の最高潮の熱を、思い出していた。

俺は、すぐに、彼女の狭い、柔らかい内部で、衝動的なリズムを刻み始めた。

「んんんんんっ！あ、あ、あ、ああ……っ！」

彼女は、もう、言葉にならない。全身の力が抜け、俺の動きに合わせて、体が、痙攣する。

「……っは……っ！あやな、ここ、が……っ！昨日の、一番、気持ちよかった、場所……っ！覚えてるか？」

俺は、昨夜、彼女を絶頂に導いた、一点を、狙い澄まして、強く、突き上げる。

「——ひいっ！んんんんっ！や、だ……っ！あそこ……っ！あああ……っ、あそこ、は……っ！きもち、よすぎ、る……っ！」

彼女は、俺の腰に回した手を、強く、俺の皮膚に食い込ませた。

「……っは……っ！もう、だめ……っ！ああああ……っ！そこは、もう、いっちゃ、う……」



すべてが終わり、俺は、彼女の肌の上に、倒れ込む。

彼女は、荒い息を繰り返しながらも、俺の髪を、優しく、優しく撫でていた。

「……」

「……ん」

「……このまま、ずっと、いたい」

その声は、初めて聞いた、愛と、依存に満ちた、甘い、吐息だった。

「……ああ。……もう、離さない。絶対に」

俺は、彼女の濡れた体に、深くキスをした。

俺たちの熱帯夜は、終わらない。

このエヴァのパイロットと、俺の、融合は、ここから、永遠に、始まっていくのだ。

く  
完  
く